

42211

教科書文庫

4
810
42-1915
20000 82069

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

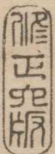
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

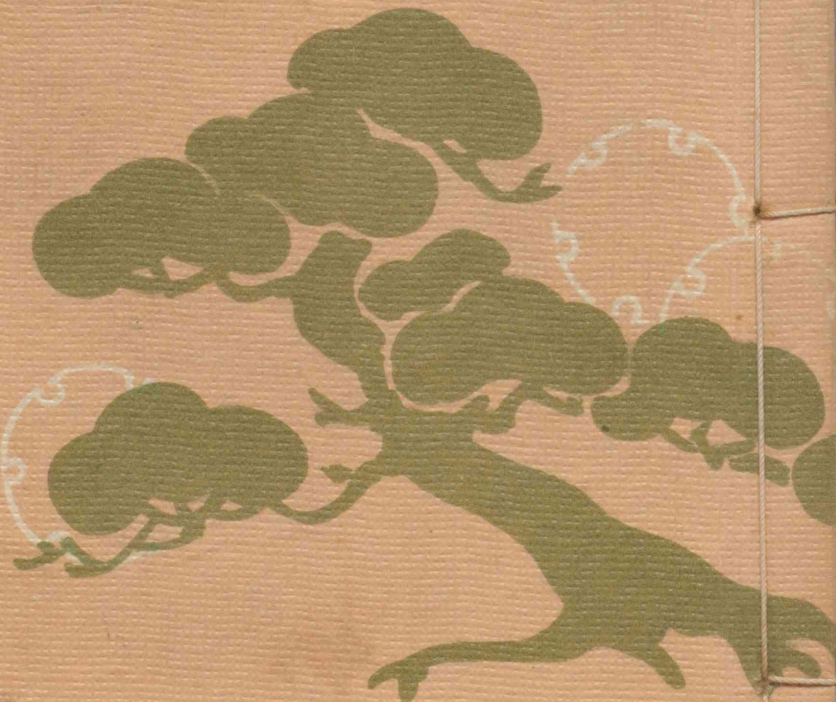
4b
810
24

實科高等
女學校用

國語讀本



卷三



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

日五十二月二十年四正大
(書用科語國校學女等高)

46
810
54

濟定檢省部文

元元堂書房編輯所編纂

實科高等
女學校用
國語讀本

東京 元元堂書房



資料室

實科高等
女學校用
國語讀本
卷三目次

- 一 千里の春 その一……………大和田建樹……………一
- 二 千里の春 その二……………大和田建樹……………四
- 三 笙の祕曲 (韻文)……………坪内逍遙……………九
- 四 近江聖人……………橘 南 谿……………二四
- 五 苦は樂の種 (箴言)……………徳川光圀……………二
- 六 世界の周遊 その一……………五十嵐 力……………三
- 七 湖山長者……………五十嵐 力……………二七
- 八 養蠶……………小島政吉……………三
- 九 註文 (書牘文)…………………………三六

目次

蠶卵紙を註文する文……………三六
 染物を註文する文……………三七
 反物を註文する文……………三九
 一〇 茶の湯と生花……………坪内逍遙…四〇
 一一 室内の裝飾……………四四
 一二 小彫刻家……………平野のち…四七
 一三 梅雨……………徳富蘆花…五五
 一四 造化の鞭……………幸田露伴…五七
 一五 生存競争（口語文）……………丘 淺次郎…五九
 一六 夏の衛生……………六六
 一七 傳染病……………七〇

一八 見舞（書牘文）……………八〇
 病氣見舞の文 同返事……………八〇
 暑中見舞の文……………八二
 一九 我が故郷（口語文）……………徳富蘆花…八四
 二〇 教へ草……………九〇
 二一 世界周遊 その二……………九五
 二二 萬國比隣……………志賀重昂…一〇一
 二三 日本人の生活……………中江兆民…一〇六
 二四 家庭の經濟（口語文）……………下田歌子…一二一
 二五 笑話……………一二七
 堪忍……………柳澤淇園…一二七

猫……………篠崎東海…二八

二六 鳥なき里（韻文）……………島崎藤村…二〇

二七 農人形……………二三

二八 田園日記……………二六

二九 佐藤つる……………井上 毅…三三

三〇 郷里の弟に（書牘文）……………高山樗牛…二九

三一 甲冑堂……………橋 南 谿…四〇

三二 大和魂の權化……………一四五

目次終

實科高等
女學校用 國語讀本 卷三

一 千里の春その一

大和田建樹



山青く浦霞む。千里みな春なり。此の間に一線を
 曳くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道
 を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙
 とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑、畫か。
 七砲臺邊、波穩にして、羣れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに
 似たり。帆を半ば張りて出でゆく船あり、艚をあや

州一洲

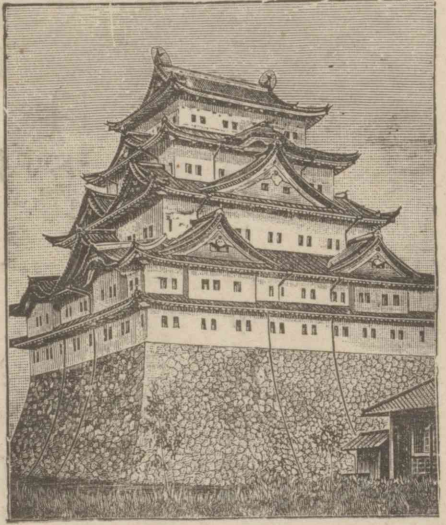


富士山

つりて横ぎる舟あり。房
 總二州の山々は霞に消え
 て、視れども見えず。
 松青きところ、桃の花紅な
 り。藤澤の野、山北の谷、人
 ごとに唯美しと呼ぶ。
 三保の松原煙り渡りて、春
 は畫の如し。磯に碎けて
 折れ返る波、波路の末に浮
 き立つ雲、何物か造化の妙

香一香

筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かん
 ともせず。香としてほの見ゆるは伊豆なるべし。



名古屋城

れつゝゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せたり。
 田夫は金の鯨を背にして妻と語り、行商は旅宿の可

草二艸

*源義仲。

否を評して我が好む方へと人を勧む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、
京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡はいづれの處ぞ。
問へども、答へず。霞にたゞまるゝ遠近の山影、
或は淡く、或は濃く、鳩の浦風、波に眠りて、粟津の松原
ひとり昔を語り顔なり。(雪月花)

二 千里の春 その二

大和田建樹

東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我を迎へて
歌ふ。最愛の母に逢ひ、なつかしき父と語るに似た

るは、いつも京都に著きたるとき心地なり。

柴一芝

山紫に、水明かなるところ、たゞ夢のごとく、現のごとく、
三條をわたり、四條をわたること、日に幾度ぞ。躑躅を柴に折り添へて戴き連れたる大原女も、いつしか我が友となれり。如意嶽より吹き來る春風は軽く我が袖をはらひて、行くへは遙かに堤の柳の絲にあり。

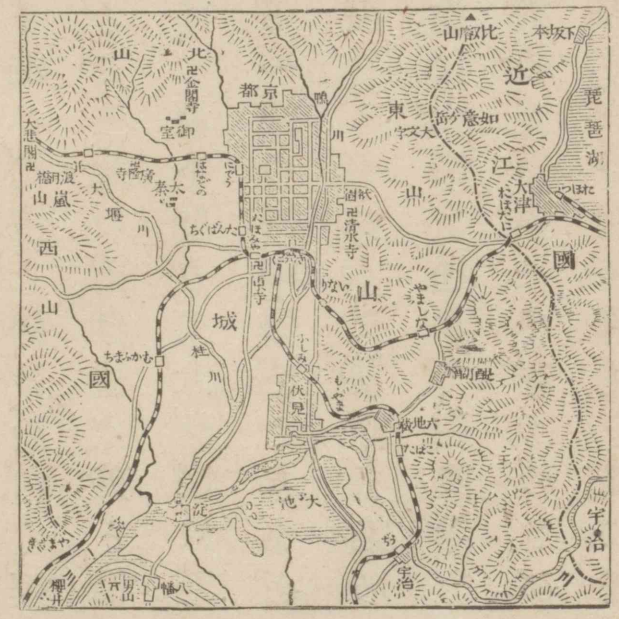
花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客
けふも清水觀音堂の前をみたしぬ。舞臺の上より
見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一

餅

幅の晝なるに、姥は此の間に立ちて「蕨餅めせ。」など呼ぶ。しばし憩ひて、眺めわたせば、淺黄に、藍に霞み渡れる八幡山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。燈火の影は水に映りて、星の如く、花の如し。祇園の夜櫻看んとする人は神山へと向ふ。一本の老木は枝を垂れて、篝火の焰に護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顔を打つ。田樂を賣る聲、茶を勧むる聲、この花の前後に山彦を反し來る。

技枝

梢



る。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點

西山の花看る人は、多く先づ御室を指す。松緑に、樓門赤く、茶煙たえぐに颯りて、花きはめて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包ま

阪二坂

綴して咲き誇る花、嵐山の春こそ今酣なれ。小舟漕ぎゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。水清く巖を洗ひて玉と碎け、山白く煙を離れて空にかやくところ、此の美は彼の美と相映じて自然の彩色をなす。坂を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるる一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、さながら西陣を織り出せるが如く、又友禪を染めなせるが如し。途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども、客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は門の仁

姿一怒

王に紙礫を打ちつけて去る。暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうく、鴨川に襲ひ來れり。清水の堂も半ば隠れぬ、大文字も姿を隠しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るく、色どられゆく山影、淡く、濃く、青く、黒く消え行く人影、いづれ詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四圍たゞ寂寞。かへりみすれば西山もなく、北山もあらず。(雪月花)

三 笙の祕曲

坪内逍遙

霞たなびく小松原、

後三年の役。

源賴義
義家
義綱
義光

從軍

さゝ波よする近江路を、
征討軍に加はらんと、
新羅三郎義光が
駒走らする後より、
追ひすがりたる武者一騎、
これぞ豊原時秋なる。
「われも共に。」と從軍し、
美濃路・尾張路・三河路と、
日數重ねて、相模なる
足柄山につきにけり。

臨望

頃しも彌生半ばにて、
櫻にかゝる月影の
朧に霞む春の空、
鬼神も心や和らがん。
文武の道を兼ねそなへ、
笙吹くことに巧みなる
義光この時思ふやう、
「われは軍に臨む身の、
生死の程もはかられず。
世にたぐひなき靈妙の

大食調入調。

授一援

笙の祕曲^{*}の、このまゝに
 世に傳はらで亡びんは、
 この道のため惜むべし。
 よし、時秋に傳へん。」と、
 二人、岩が根に座を構へ、
 傳授の祕曲盡しつゝ、
 月下に吹くや、笙の笛。
 満山寂と静まりて、
 澄み上りたる笛の聲、
 岩間清水か、松風か、

磬一盤

妙音天地に溢れけり。
 義光やをら吹き了へて、
 祕傳具さに授けはて、
 「いでや、時秋、道のため、
 はやぐ都に歸れよ。」と
 いひつゝ、立てば、驚きて
 なほ從軍を願へども、
 思ひ定めしものゝふが
 動かぬ心は、磐石の
 重さは劣らぬ文と武や、

行くは武の道、引き返す

文藝の道も貴しと、

なごり惜しさを忍びつゝ、

西と東へ別れ行く。(高等國語讀本)

四 近江聖人

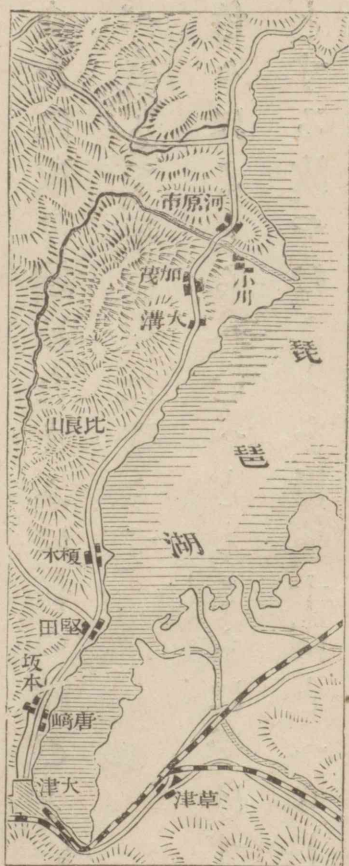
橘 南 路

あるとき、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて榎木の宿に至りて泊る。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取り上げて

中江藤樹
通稱は與右衛門
その學徳を人推し、近江聖人といふ

忘—妄

見れば金二百兩あり。馬方大いに驚き、「今の飛脚の取り忘れたるにこそ。」と思へば、そのまゝ、榎木に走り



行きて、飛脚の宿れる宿に到り、對面して委しく

失—矢

尋ね問ふに、相違なければ、其の金を取り出して返しけり。飛脚は死したる者のよみがへりたる心地して、悦のあまり、行李より別の金十五兩を取り出して馬方に與へ、「若し此の二百兩なくば、我が一命を失ふ

禮_二礼

のみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。されば、そのこの高恩なかく、言葉のいひ盡すべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。」と、涙を流して悦ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて、「そなたの金をそなたに取り納めたまふに、何の禮ごといふことあるべき。」とて、手にだに取らず。

色々にこしらへいへども、さらに受けずして歸らんとする故、やむことを得ず、十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々とへらして、つひには金二歩となし、せめてこればかりは我が心の悦なれば、受け給ふべ

盡_一畫



中江藤樹像

し。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵も寝ねがたし。」と、理を盡し詞を盡していふにぞ、「此の金を受け申すほどならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。これは今夜休むべき處をこれ

又此情を字に記し、此日不毎
トキニは先づもて又此
情を記すべし

又此情を字に記す

中江藤樹筆蹟
(名家手簡)

買一買
賣一買

まで追ひかけ來れる賃錢なり。これは我がとるべき錢なれば申し請くべし。」といひて、二百文にて酒を買ひて、其の家人にふるまひ、我も酔ふほど飲みて歸らんとす。

釋一釈

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはする。」と問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れるものにあらず。只我が在所の近所に小川村といふ處あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことをす。某も折節行きて聞き侍りしに、「親には孝を盡すべし。主人は大切に

到一至

すべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。」などいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば取るべき理なしと心得しまでのことなり。」といひすて、歸りぬ。飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命生き延びて、各方にも對面することとなりぬ。」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節其の家の裏に熊澤治郎八、田舎より上り居て學問修業中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ誠の儒といふものなれ。」とて、其の翌日すぐに江州に至りて、

澤 沢

小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべ
き程の學徳なし。」とて、更に隨從を許したまはず。熊



熊澤蕃山像

れ、遂に子弟の契約をせられけりとぞ。

その後藤樹を備前より招き給ひしに、その身は病身
なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり、御役に

澤ひたすらに願ひて、二日が間
藤樹の門にたゞずみて歸らず。
藤樹の老母これを氣の毒がり、
「よしや、まづ内へ入れ申せよ。」と
ありし故、いなみ難くて内に入

も立つべきものなり。」とて、熊澤を出されたり。いづ
れも格別のことなり。(東遊記)

五 苦は樂の種

徳川光圀

苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。主人と親とは



徳川光圀像

無理なるものと思へ。下人は
足らぬものと知るべし。
子ほどに親を思へ。掟におぢ
よ、火におぢよ、分別なきものに

寝 寐

おぢよ。朝寝すべからず、長座すべからず。

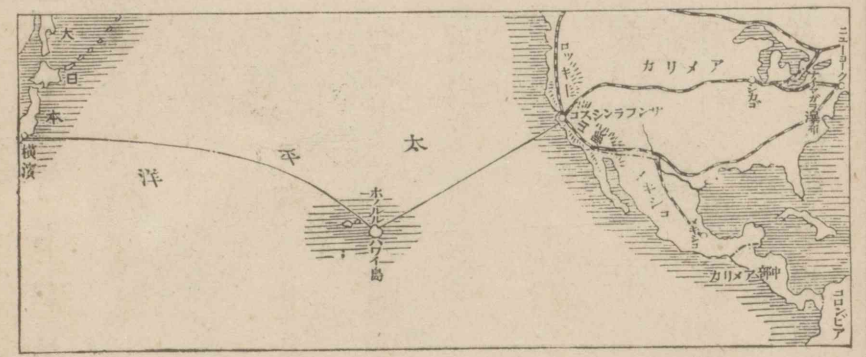
小なるものは分別せよ、大きなことは驚くべからず。九分は足らず、十分はこぼると知るべし。

六 世界周遊 その一

見送る人々に別れを惜みつゝ、横濱港より米國行の便船に乗る。觀音崎を出づれば、船、太平洋を東に走り、こひしきわが陸いつしか見えずなる。來る日も來る日も海の上を走る。東するに従ひ、日の出の時、間早くなりて、時計と合はぬやうになるも、をかし。布哇ヘライに寄港して出稼の人々をおろし、且、石炭を積み

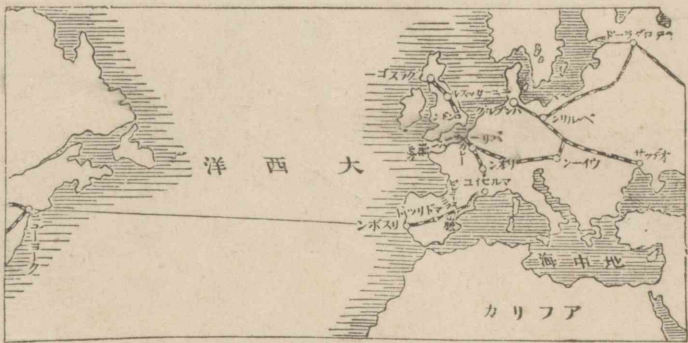
船フネ 船

貨モノ 貨



込む。これよりなほ航海すること三日程にして亞米利加の大陸見ゆ。土あかく、樹木異様なる山あひを進めば、船ほどなくサンフランシスコの港につく。これまでの海路は二千五百哩なり。船は波止場に横づけとなる。上陸すれば税關にて貨物の調べあり。街のにぎはしさと、路の美しさ、また格別なり。見物して、大陸鐵道に乗り、紐育ニウヨークに向ふ。

冠—冠



三千三百四十五哩の鐵路を八十七時五十分に走るなり。その開ロッキーマン地方を除きては、概ね平野・牧場のみ。市俄古に立寄る。こゝには名高き家畜會社あり、五萬の牛、二十萬の豚、五千の馬を飼養し、一箇年に仕入る家畜の總額は無慮二億弗にのぼるといふ。

紐育の商工業は世界に冠たり。高架鐵道あり、馬車鐵道あり。家屋は層樓雲を凌ぎ、最

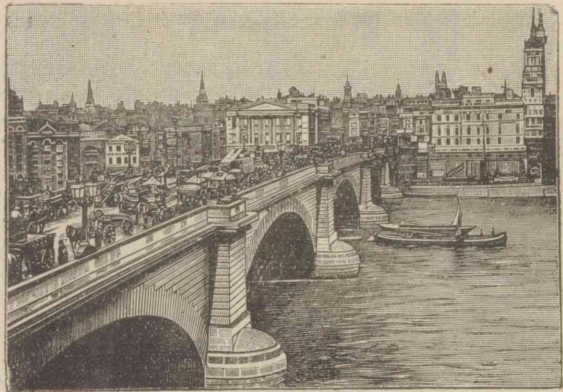
も高きは二十八階に及ぶ。ナイヤガラの瀑布へは一夜にして達すべし。

紐育より太平洋を航して、歐羅巴の葡萄牙に著し、その首府リスボンより汽車にて西班牙に赴く。西班牙人は頭髮黒くして東洋人に似たり。此の國中世紀には盛んなりしが、今は衰へたり。

汽車はピレニース山脈を超えて佛蘭西に入る。此の邊には十數里に亘れる葡萄園あり。數日にして馬耳塞につく。地中海の北岸にありて、歐洲大陸の旅客の一たびは集まる所なり。こゝよりまた汽車

歐—歐

會一會



橋 敦 倫

に乗り、絹布の製造に名高き里昂市に立寄り、又汽車にて巴里に著く。巴里は佛蘭西の首府にして、世界第一の豪華の都會なり。歐洲に遊ぶ者は巴里を見ざるを恥とす。巴里よりカレーに出で、ドーバー海峡を越えて倫敦に赴く。倫敦は英國の首府にして、世界第一の大都會なり。商業の盛んなること實に驚くべし。

製造業に名高きグラスゴー附近は、製鐵造船、そ

暗一闇

の他の工場の煤煙に晝も小暗く、ニューカッスルのアームストロング會社の如きは、製砲職工二萬餘人を使役せり。英國は分業の進めること、工業家の資産に富めること、世界第一と稱せらる。

七 湖山長者

五十嵐 力

今は昔、山陰道の或村に湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなして居た。衣るには美しい綾錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには

錦一綿

七 湖山長者

七

季 李

數多の婢僕があり、そして所有の田地は廣々と稻の波を打つて居た。

或年の夏の田植の事である。長者の家では季節中の最上吉日を卜して、この廣い田に田植をすることになった。長者の家に使はれて居る者は勿論、近郷近在の者どもまで、今日こそ長者の田植だといふので、老幼男女數をつくして、身仕度かひなく、我も我もと田圃をさして手傳に出かけて行く。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつゝ、思はず得意の微笑を漏して居た。

傳 傳

早 早

仕事は面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手の動く度毎に、濕つた黒い土が片端から青くく變つて行く。仕事はめきくと運んだが、名に負ふ長者の廣い田地の事であるから、植ゑるに果てしなく、まだ數段を残してある中に、日は早西の山に入らうとした。長者は之を見て、あゝ今少し日が高くば全體めでたく濟まうものをと、しばし深い思に沈んだが、つと立つて黄金の扇を持つて來て、さつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度まで招いた。

扇 扉

見る間に、山の端にかゝつた夕日は三段ばかりのぼ

威—威

つて來た。田に立つた村人等は、天道様を左右する長者の威力を見て、如何に驚いたであらう。かくして、これまでと思つた田植も思ふまゝに捗つて、その日も無事に暮れた。

床—牀

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、夏の短い夜はやがて明けた。朝の床を起き出た長者は、入日を招き返した喜びと心驕とで、眼中いよ／＼何物もない。儼然とした態度で、召使や村人を呼んで、「昨日一日で植ゑ上げた田の様子を見て來い。」と命じた。ところが、出掛けていつた者、誰一人腰をぬかすばかりに驚かぬ者はなかつた。

理—埋

驚くのは無理はない。見よ、さしものに廣かつた長者の田地は迹方もなくなつて、漫々とした潮が朝の嵐に白い波を立て、居るではないか。數十人で一日植ゑ付けた早苗が一本も見えないで、渚には羣立つ蘆が波に洗はれ、風に戦いで居るではないか。

羣—群

長者の家は此時から一日一日と衰へた。そしてこの廣い田と同じ運命を以て亡びてしまつた。(趣味の傳説)

八 養蠶

小島 政吉

わが國より外國へ輸出する産物の中にて第一位を

蠶

占むるものは生絲なり。抑この生絲は如何にして生ずるかといふに、蠶といへる昆蟲の生成物に外ならざるなり。

春去り夏來らんとして桑葉の僅かに萌え出づる頃、蠶は蠶卵紙にある卵より孵化す。これを籠に移し、桑葉を刻みて與ふること日々數回、かくて五日乃至十日にして蠶は桑を食むことを止め、眠るが如く休息し、やがて全身の皮膚を脱ぐ。これを第一眠と稱し、蠶のこゝに至る間を第一齡といふ。

かくて二眠・三眠・四眠を経て第五齡となる。初生の

嚙

時に殆ど見るべからざるほど小さかりし黒き毛蟲は、今や生長して長さ大約二寸の青白き裸蟲となり、食を取ること最も盛んなり。人若し蠶室の中に立ちて、數千の蠶の一時に桑を嚙むを聞かば、驟雨の俄かに到りて屋を撲つが如きを覺えん。

さる程に、蠶は漸く食を斷ち、身は次第に透明となり、這ひまはりてしきりに繭を造るべき處を求む。此の時、藁或は樹枝を籠に盛り、いはゆる簇ハナを造りて、蠶をその中に移す。かくする事を上簇といふ。上簇の後、蠶は身を適宜の位置に置きて口より絲を吐き、

收収収

右にかけて左に引き、上にかけて下にわたし、經緯縱横漸く身を覆ひ、益四周に絲を吐きて止まず。數日にして繭全く成り、蠶はその中に籠りて蛹と化す。孵化よりこゝに至るまで、凡そ三十餘日なり。かくて簇を去り、繭を收め、絲を製す。繭をそのままに放置すれば、中なる蛹は化して蛾となり、繭を食ひ破りて出づ。蠶兒は實に此の卵より孵化するものなり。食ひ破りたる繭は、眞綿を製するに用ひらる。

凡そ蠶を養ふや、夙に起き、夜に寝ね、桑葉を摘み、汚物を除くはいふも更なり、或は室を溫暖にし、或は之を清涼にし、水を撒きて乾燥を防ぎ、火を焚きて濕氣を除くなど、片時も注意を怠るべからず。その煩勞いかばかりぞや。數十萬の蠶の頭を並べて一時に病に就けるときは、その原因を尋ねて急に治療の法を施さざるべからず。その憂慮いかばかりぞや。されど健全にしてよく發育したる蠶の上簇を終へ、全簇恰も雪に埋れたるが如くなれるを見しときの愉快、それいかばかりぞや。

春蠶の終る頃夏蠶孵化し、夏蠶の終る頃秋蠶孵化す。

並並並

忙—忘

三期を通じて三四箇月の間は、養蠶家の繁忙いはんかたなし。
養蠶の事は最も婦女の業務に適す。故に、信濃・上野などの蠶業地に於ては、老となく、少となく、皆この業に従事し、猶足らずして、他の地方より婦女を雇ひ入るゝこと幾何なるを知らず。されば此等の地方にては、蠶事の巧拙を以て嫁娶の一條件にすら數ふといふ。

九 註文

蠶卵紙を注文する文

枚—枚

御社より御製造の蠶卵紙立田姫この度當養蠶所において試養いたさるやと存じゆり、取敢へず一枚だけ注文致しゆ。就しゆは、品質等精しく吟味のよ、至急お郵送下されたく、此際お頼み申しゆ。追て代金及び郵税としく、為替券封入の上、置きおます、お落手りさるべくゆ。漆物を注文する文

號二號二
号

このたび賣出しの景品用として手拭少く
用意したたく、別便として白地十反と馬丹
申しあげ、来る十日までに間違なく
お返し下さいました。漆模様は斜子
半分程をお納戸として、其の處へ雪月花を
漆ぬ抜き、残り半分を白地として、扇形を
描き、申子屋敷を平假名で入付せうま
いたしてあります。何卒無事よくお考案の上
入念まはせがけ下さいました。

及物を注文する文

此及見奉るとして、お遣はしの綿物は、地質
と云ひ、綿柄と云ひ、當地方より及至極
賣行申しかたぐいとあせられの間、取敢
へず二十反だけ注文いたしました。又席ふ少
女向の紺緋上物二十反だけお見立のと、右
二品とも来月五日までにお送り下さいました。
代金は例より着荷次第銀行で替り、
差金申すべく。先は右に注文です。早く。

註一注

九 注文

三

選一撰

千三 利休創
織田有樂齋
創む
金森可重創
片桐石見守
真後創む

一〇 茶の湯と生花
坪内逍遙
凡そ茶を味ふに三様の法あり、急須・土瓶などにて普通の茶を煎じ出して用ふるを煎茶といひ、挽茶即ち白にて精選の茶を挽きて粉としたるもの少量に熱湯を注ぎ、さてかきまはし、泡立たせて用ふるを薄茶、そのやゝ多量に熱湯を注ぎ、かきまはして用ふるを濃茶といふ。薄茶・濃茶には種々の方式あり、これを茶の湯の式と名づく。高雅なる遊なり。茶の湯は足利時代に生まれり。その流派甚だ多し。千家・有樂・金森・石州・遠州等諸派ある中にて、最も廣く

五 小堀遠江守
政一創む
利休一宗旦
宗左
宗右
表裏流

修一移



行はれたるは表裏の千家流なり。こは、その昔は清雅なる娛樂の間に禮儀作法の要旨を教へて、武人の荒々しき心を和げ、兼ねては奢侈を戒めんための遊なりしが、徳川時代に及びては、一種の表だちたる禮式として用ひらるるに至りたり。今もなほ、中流以上の社會にては、紳士・貴女の嗜みとして行はる。茶の湯と離れざる關係あるものは生花なり。生花

二 生花の本来
今京都に住す
前の茶道の
處を見よ

籐一藤

とは、手折りたる花を瓶又は盆に移し生けて室内の風情を添へ、床の間の飾となす法をいふ。昔推古天皇の御代に當り、聖徳太子が花の枝を水に生けて久しく保つ法を小野の妹子に授けたまひしに始まるといふ。妹子は謂はゆる池の坊流の遠祖なりとぞ。池の坊流の外に、なほ遠州流、石州流などいふ諸派あり。

花を生くる器には、瓶を用ふるを通例とすれど、時としては、竹筒、砂鉢、薄端などいふ器をも用ふ。又、花籠をも用ふ。花籠には、竹にて編みたる、籐蔓にて作り

秩一秋

たるなど、その種類いろくあり。

花の種類、花の生け方、何れも器につれて差別あるべし。又床の間の位置、掛物の種類、庭の趣などによりても、生け方及び置き方に工夫あるべきなり。

之を要するに、茶の湯の本意は、主客の秩序を正し、行住進退の作法を定めて、温雅清閑の交遊法を教ふるに外ならず。故にその精神に通ずることを得ば、必ずしもくたくしき儀式を學ぶに及ばざるべし。

生花も亦同じ理なり。強ひて枝を曲げ、作り撓めて自然の風情を損ひたるは醜し。なまなかにある流

儀に泥まんよりは、手折りたるまゝを投げ入れたるが風流の本意に叶ふことあるを忘るべからず。

(國語讀本)

珍—診

一一 室内の裝飾

室内の裝飾とは、珍しき物、貴き品等を陳列して室内を飾れといふ意にはあらず。常によく室内を掃除して取り散らしたる物なきやうにし、よるづ極りよく見えしむるも一種の裝飾なり。珍奇なる裝飾品ありとも、室内みだりがはしくして不潔ならば、目を悦ばしむるに足らざるべし。蓋し清潔と整頓とは

勿—勿

裝飾の主眼なればなり。

さはいへど、その家相當の裝飾品あるは、全く無きに勝ること勿論なり。而も裝飾品の取り合せといふことに常に注意を加ふべきなり。わが國にて普通行はるゝ室内の裝飾品は、掛物・置物・生花・盆栽・額等に過ぎず。かばかりの品だにも、その取り合せを巧みにし、趣味あらむむるは容易の事にあらず。取り合せに關して心得置くべきことは、先づ第一にさしあひを避くるにあり。さしあひとは、同じやうなる物の重なることなり。例へば、草花の幅の前に

味—味

草花を生け、牡丹を畫ける花瓶に芍薬を生け、赤き瓶に赤き花を挿すが如き類にして、或は色と色と、或は姿と姿との映り悪しく、それが爲に持前の美を失ひ、見榮えせぬものとなるなり。然るに少しく心を用ひて、花鳥の幅の前には岩の置物を据ゑ、草花を生けては松竹の幅を掛くるやうせば、相助けて趣味を加ふべし。室内の裝飾は、必ずしも掛物置物等に限れるにあらず、如何なる品も、利用次第、心の用ひ方次第にて室内を飾る料となるべし。但し風雅の心得なき人は、到

雅—稚

底かゝること、にその心を用ふべくもあらず、又善き工夫の浮ばん筈もなし。されば苟くも室内裝飾の必要を覺ゆるものは、先づ須く風雅心を修養せんことを力むべきなり。(國語讀本に據る)

一二 小彫刻家

平野のち

今は昔、伊太利の或町に、アントニオ、カノバといふ小童ありけり。早く父に別れしかば、祖父母の手に人となりしが、祖父は石工にて、家道豊かならざりき。『アントニオは生來虚弱なりければにや、世の常の童

堆 | 推
稚 | 推

の如く友どち打集ひて嬉戲するを好まず、常に祖父に石工場に伴はれて、鑿と槌とに親しむを上なき樂しみとせり。あはれ、老石工の作業に餘念もなきかたはら、堆ウヅカき石のほとりにありて、或は粘土を以て小さき像を作り、或は物の形を石片に刻める幼童の様の、いかにさかしげに、らうたかりけん。かくて、此の小さき手に作らるゝもの、おのづから形整ひて、めてたかりければ、祖父母はいたく喜びて、彫刻師とよびならしつゝ、行く末を樂しみて、鍾愛すること一方ならざりき。殊に、祖母はみやび心ある

膝 | 漆

ものなりければ、夕の圓居には、この童を膝に近づけて、花鳥をはじめ、世にうるはしきくさぐさのものゝ物語し出でて、其の面影を幼心にゑがけるに、あけの日になれば、やがて其の心の畫は小さき指端にほとばしりて、或は粘土に、或は石片にあらはし出されたりとかや。

厨 | 厨

同じ町に、伯爵某といふ人ありき。家富み榮えしかば、折にふれては盛宴を張り、遠近の友を招きけり。アントニオの祖父は料理の業にも堪能なりければ、さるをりくは、此の家に招かれて、厨ウヂに立ち働くを

壊—壤

常とせり。
ある日、例の如く饗宴の催あり。アントニオも祖父に従ひ行きて、料理こそ心得ざれ、食器の洗滌拂拭等を助け、何くれとなくまめやかに働きわたり。とかくするほどに、やうく饗宴の時刻も近づきぬ。今は食卓の裝飾のもなかなるべしと思はるゝころ、ふとそなたに物の破壊する音しつ。何事ならん、たゞ事ならじと怪しめるをりしも、一人の僕、手に大理石の破片を持ちて厨に來りぬ。いたくふるひをのゝきつゝ、面色さながら土の如し。

饗—響

さていふやう、おのれ大きなる過して、食卓に飾るべき像を破りつ。主人若し聞き給はゞ、何とかのたまはん。あゝ、わが罪のさり所なきを如何にせん。」といふに、人々も、これなくては饗應の筵もいと淋しかるべし。」とて、主人の怒のほどを思ひやりつゝ、いかゞはせんと惑ひけり。
折節、アントニオはながしもとにて鍋など洗ひ居たりしが、これをうちすてゝ、其の惑へる人々のもとに至りていふやう、「これに代るべき品あらば、食卓を飾り得べきか。」といふ。人々は答へて、「そはいふまでも

夢 二 焚

なし。其の大ききだにふさはしくば。」といふ。アントニオこれを聞きて、事もなげに、「おのれさるべきものを造り出でん。試みしめ給はずや。」といふ。人々打笑ひて、「あなをかし。何の夢見てたはこといふぞ。」と嘲り居たりしが、僕の中にアントニオの平生を知れるものありて、「とにもかくにも、其の詞にまかせんは如何に。」と言ひ出でけり。もとよりさるをりから、外にすべき方もなかりければ、其の詞に任せつ。さて、厨には、今日の調理の料として黄金色の新しきバタの凡そ三百斤許りなる大塊あり。アントニオ

嘆 二 歎

は之を請ひ求め、料理用の庖刀を以て、やをら刻みはじめしが、しばしありて、バタはたけき獅子の奮迅せんとするやうなる形になりぬ。さきに嘲りしものども打寄りて、其の巧なるに驚きつゝ、「なかく」にもとの像にまされり。」とて、いたく嘆賞せり。かくて定めの際になりたれば、伯爵は客人を案内して食堂に入りしが、先づ人々の目を惹きしは、黄金色なる獅子なりけり。何れも、「こは大技術家の手にこそなりつらめ。特にバタを用ひたる所いと興あり。さるにても、この大技術家は何處の誰ぞ。」とて、賞

祖
祖
租

讚の聲を止めず、口々に其の技術家の名を問ふに、主人も、「方々の驚かるゝやうに己も驚き居るなり。」とて、僕頭を呼びて、「この美しき像は如何にして手に入りしぞ。」と問ふに、「やうく、一時閒許り前に作り出でたるなり。」とて、ありしことどもを具さに聞えければ、主客の驚嘆一方ならざりき。

主人やがて小童を招きて、其の名と師とを問ひしに、「名はアントニオ、我が師は石工なる祖父。」と答へしのみ。客はこのくすしき幼年技術家を圍みて、その技を賞し、とりあへず食卓に著かしめて、その爲に祝杯

を擧げたり。

技
杖
杖

後、伯爵は、アントニオをその家に引取り、國內のすぐれたる技術家を招きて、その師となし、かば、おのづから備はりたる天才は益發達して光を放ち、翌年になりては、國內に竝ぶものなきに至り、祖父母の呼びならしけん彫刻家は、今ぞ大彫刻家として世界に輝き出づるに至れりとぞ。

一三 梅雨

徳富蘆花

雨降りて止み、止みて復降る。 鶉聲と蛙聲とこもご

畑
畑

も雨晴を争ふ。
雨の絶間に出でて、麥藁まじりの深泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、緑暗き家には人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植うる女あり。嫩黄田々秧猶疏にして水多く、田より田に落つる水は音さへ濁りてごぼくと鳴る。

蘆
蘆

川には膏の如き碧潮満々として、黄なる麥藁一束浮き沈みつゝ、漂ふ。川邊の蘆、稀に穂を出せり。その蘆を折り敷きて、鰻・鯊を釣る子供あり。氣重うしてこまやかなり。村より出づる煙の濕り

て立ちものぼらず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く、緑濃くして、滴水を落さば、色融けて流れんとするさまを見よ。

山に梟の聲あり。雨はらくとまた降り出でぬ。

(自然と人生)

一四 造化の鞭

幸田露伴

拔
拔

雑草といふものこそ恐しきものなれ。之を踏み躪り、之を刈り薙ぎ、之を抜き棄て、之を焼き拂ひても、終に盡き滅びたる例を聞かず。必ず年々の春夏を我

虐—虚

が世顔に生ひ茂りて、あはよくば、人の思を寄する園の花をも逐ひ退け、民の命と頼む稻麥をも虐げて己のみ心のまゝに蔓り榮えんとす。されば、園守田夫少しく之を除き去ることを怠れば、忽ちその咎を得て、花は色なく、穀は登らざるに至ること、彼の「道高きこと一尺、魔の高きこと一丈」といへる諺も思ひ合さるゝばかりなり。世若し雑草といふものなかりせば、善く勤むる者も惰る者も、一度種子を播き、苗を植ゑたる以上は、皆同じ報を得べきに、これありて、勤むる者は佳報を得、惰るものは悪果を得るなり。雑草

は人間の怠惰を警むる造化の鞭にやあらんとおそろし。(潮待ち草)

一五 生存競争

丘 淺次郎

餘—余

地球上には各種の動植物をして自由に増加せしむべき餘地はない。そこへ各種の動植物が遠慮なしに多數の子を生むのであるから、互の間に劇しい競争の起るは見易い道理ではあるが、其の有様を詳しく論ずるには、先づ諸生物の生活する有様から考へてかゝらなければならぬ。

虎
||
鹿

動物の中には、獅子・虎・狐狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子・虎等の餌となるものは矢張草を食ふ動物ゆゑ、動物の食物は直接にか間接にか必ず植物より取る外はない。又海産の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな工合で、どれもこれも、皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌にするから、此の場

牲
|
性

合にも、動物の食物の根原は矢張植物界にある。斯の如き有様ゆゑ、植物なしには草食動物は生きて居られず、草食動物なしには肉食動物は生きて居られぬ。草を食はなければ生命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は初めより毎日若干の草を犠牲に供する積りでなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初めより若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。草と草食動物と肉食動物とが相並んで互に犯さず、共

減—滅

に生存して行くといふことは到底出来がたい。昔、印度の釋迦が山中で難業苦行をして居られる處へ惡魔が試しに來た話がある。まづ鳩に化けて飛んで來て、「お釋迦様、今鷹が私を捕つて食はうと追つかけて來ます。どうぞ憐れと思つてお助け下さい」といつたので、釋迦はすぐに鳩を懷に入れて隠してやつた。處へ又惡魔がすぐに鷹に化けて飛んで來て、「お釋迦様、私は久しく物を食はず、非常に腹が減つて居ます。今追ひかけて來た鳩を食はなければ、餓死する外はありません。どうぞ憐れと思つて今の

言—旨

鳩を出して下さい。」といつた。そこで、釋迦はどうしたらよからうと思案した後、自分の腿の肉を少し殺ぎ取つて之を鷹に與へ、遂に兩方を助けられたといふことである。素より是は、苟も慈悲忍辱を旨とするものは、此の心掛でなければならぬといふ譬で、教訓としては最も妙であるが、實際鳩も鷹も一羽より外に無く、それを僅かに一日だけ助けるのならば此の方法で差支はないが、總べての鳩と總べての鷹とを兩方ともに何時までも助けることは決して出来ぬ。幸、惡魔が再び鳩と鷹とに化けて來なかつたか

繰—繰

らよかつたやうなもの、若し根氣よく此の試しを何回も繰返し、又鳩に化けて来て隠して貰ひ、又鷹に化けて来て腿の肉を殺いで貰つたならば、一度に半斤づつとしても、十回には五斤となつて、今度は釋迦が死んでしまふ。

又、長閑な春の日に野外に散歩して見ると、草木の青と茂り、花の美しく咲いて居る處に蝶が面白さうに飛び廻り、小鳥が楽しさうに歌つて居る。詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪にかいて、共に此の世の楽しさを賞めた、へるが、是は極めて皮相な感じて、

穩—穩

少し丁寧な考へて見れば、世の中は決してそんなに無事平穩なものではない。鳥が斯く歌つて居られるのは、今日までに數十萬の蟲を食ひ殺した結果で、歌ひながらも、尙蟲の命を取らうと探して居る。又蝶が斯く舞つて居られるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食ひ枯らした結果である。而して彼處の樹の枝には、蝶を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が網を張つて待つて居るし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つて居るから、蝶の命も小鳥の命も殆ど風前の燈の如く、一つ油

斷すれば忽ち食ひ殺されてしまふのである。なか
なか氣樂に遊んでばかりは居られぬ。動植物は總
べて斯の如く相殺し相食うて、自然界の平均を保つ
てゐるのである。(進化論講話)

一六 夏の衛生

邊 邊

鶯の聲にひかれて野邊を訪ひ、蝶に戯れて花に眠り
しは昨日と思ふには、はや木々の若葉黒ずみ來りて、く
すしき雲の峰、一天遙かに峙つ頃とはなりぬ。
照りはたゞく天つ日かげの堪へ難きに、家にこもり

汗 汗

て文讀まんとすれば、眠氣のみさし來り、外に出てて
働かんとすれば、滴る汗は玉をなし、人々生氣なきこ
と恰も死せるが如し。四季の中最も苦しきは、げに
夏なりけり。

かく身體の勢力衰へたる時には、病に冒され易きも
のなり。殊に虎列刺、赤痢など種々の傳染病の流行
するは此の時季なれば、衛生の心がけ最も肝要なり。
抑、人の健康を保つ道はさまざま、あれども、内には胃
腸を健かにして食物の消化を良くし、以て滋養の效
を完からしめ、外には皮膚を強くして、寒暑の推移に

浸—侵

あひてもよくこれに抵抗する力を養ふにあり。夏はことに皮膚軟弱となるを以て、氣溫聊か變化するも、忽ち風邪にかゝる事あるものなれば、これを防がん爲には、毎朝冷水にて強く身體を拭ふべし。これ實に簡易にして且有效なる方法なり。特に海水浴を行ふは最もよき方法なり。海水浴は鹹き水に身體を浸すものなるが故に、皮膚を強くするは更なり、海面を吹き來る清爽の風に呼吸のはたらきを進め、血液の循環をよくする效あり。況して、朝夕に移りかはる海洋の廣濶壯大なるさまを眺めては、氣宇

胃—胃

自ら暢びて、全身の健康も忽ち進むが如く覺ゆべし。皮膚と共に心を用ふべきは胃腸なり。胃腸は日々飲食の料を取りて之を消化し、身體を養ふものなり。されば若し過度の飲食をなして胃腸を害する時は、全身これが爲に衰ふるを免れず。病は口より入るといへるは、誠にさることなり。殊に夏日は胃腸も衰へ、飲食物も腐敗し易き時なれば、消化し難きものは、つとめてこれを避け、ひたすら胃腸の健かならんことをはかるべし。更に望ましきは、毎朝早起して芝生の露をふみわけ、

暑署

晝間の假睡を避け、毎夜早く臥床に就きて、心を休め身を養ふにあり。

かく、心を用ひて衛生の道を守らば、病に冒さるゝこともなかるべく、暑ぐるしき夏をも楽しく暮すことを得べし。(女子新讀本に據る)

一七 傳染病

傳染病中最も悪性にして、禍害の劇烈なるものは、虎列刺・赤痢腸窒扶私・バラチフス・痘瘡・發疹窒扶私・猩紅熱・實布垵利亞・ペストの九種にして、若し是等の病に

かゝれば、法律の規定する所に従ひ、傳染病院又は隔離病舎に於て療養を爲し、居室及び患者の使用したるものは、總べて當局吏員の指揮の下に消毒せざるべからず。

虎列刺の病原はコンマ狀細菌なり。もと印度地方に發生し、しばしば世界に大流行を來せり。我が國には文政五年の頃大流行ありしを始とし、印度・支那地方より輸入せらるゝを常とす。此の病は胃腸を侵すものなれば、患者の吐瀉物、殊に大便に病原菌を有し、不知不識の間に、下水・井水・河水等に混じ、飲食物

輸輪

腸
腸

に附着して傳染するに至る。されば完全なる水道の設ある都市に於ては、水道の水を用ふべきは言ふに及ばず、井水、河水等を用ふる處にては、飲料水を始め、食器を洗ふ水に至るまで、必ず之をわかつて用ふべし。又暴食、暴飲、其の他未熟の果物等により、胃腸を損するは最も危険なりとす。赤痢は全國にわたりて流行し、毎年二三萬人の患者あり、死亡者は約其の五分の一に及べり。是亦虎列刺と同じく、水及び飲食物より來るものなれば、水、飲食物、食器等に注意すべきこと、虎列刺に異ならず。

刺
刺

されど、病狀虎列刺の如く劇烈ならざれば、往々治療を等閑に附することあり。加之下痢の爲に衣類を汚し易く、しばしば洗濯を要するを以て、家族及び隣家に傳染するの虞殊に多し。我が國にては地方の風習により、河流に衣類、便器を洗ひ、不潔物を流すものあり。是甚だしき惡習にして、若し病毒を混ずることあらんか、爲に幾萬の人命を危うする事なしとせず。

腸窒扶私は昔のいはゆる傷寒にて、其の發するは春秋二季に最も多し。全國患者數年々二萬餘人を算

冒二胃

し、其中約五分の一は死す。病の初期は殆ど感冒に異ならざれば、傳染を受くる機會最も多し。故に熱の高き患者は豫め注意し、速かに治療を求むるを良しとす。患者あらば隔離して養生せしむべく、其の汚物・衣類・寢具等、總べて制規の消毒法を行ふべきものとす。バラチフスは其の症狀腸窒扶私に類似せるものなれば、之に對する注意も亦腸窒扶私と同様なるを要す。痘瘡は西曆一千七百九十六年、英國の大醫 Jenner 氏、種痘法を發明せしより、豫防し易きものとなれり。

效一効

爾後文明國に於ては、多く強制して種痘を行はしむ。我が國にても之が厲行に力むといへども、尙之を怠るもの少なからず、爲に年々多少の患者を出すは、文明國民として恥づべきことにあらずや。現行の法律によれば、初生兒は出生より翌年六月に至るまでの間に於て種痘を爲し、若し不善感なる時は、又其の翌年六月に至る間に於て更に之を爲す。之を第一期の種痘とす。次に數へ年十歳の時再び之を行ひ、若し不善感ならば、翌年十二月までに更に之を行ふ。之を第二期の種痘とす。然れども種痘の効力の確

實なるは大抵數年間なれば、痘瘡流行の徴あるときは臨時に種痘すべし。痘瘡を経過せしものといへども、決して油斷すべからず。かつて痘瘡にかゝりし八十歳の老人にして、種痘に感じたる例さへあればなり。

膚一腐

發疹室扶私及び猩紅熱は、いづれも皮膚に赤く發疹する熱病なるが、發疹室扶私は我が國には幸に稀なり。是等の病は患者より直接に傳染するのみならず、空氣中より傳染することあり。患者の衣類は十分なる消毒を爲さざるべからず。五箇月・十箇月後

に衣服より傳染したる例も少なからざればなり。實布埤利亞は大人には稀にして、四五歳の小兒に多し。近年血清療法發見せられて、治療の効甚だ著しきものあり。小兒の多き家に患者を生じたるときは、健康兒にも亦豫防の爲に血清の注射をなすを良しとす。患者の痰、唾及び衣類、寢具等の消毒に注意し、小兒又は小兒に接する人は、成るべく患者に近づかしむべからず。

防一妨

ペスト豫防上深く注意すべきは家鼠のペストなり。鼠はペスト菌に對する感受性最も強く、病菌に接す

觸

る機會あれば、直ちに之に感染し、遂に人類に傳染する危険あり。故にペスト豫防の第一手段は、鼠を驅り盡して其の危険を防ぐに在り。蚤は本病の媒介をなすこと多きが故に、蚤の發生せざる様清潔にするも亦豫防上必要なる事とす。又此の病は創傷より入ること多ければ、身體に創傷ある時は、傷口を外氣に觸れざる様にすべし。

以上九種の急性傳染病の外、結核、癩、トラホーム、マラリヤ等も亦傳染する病なり。結核の肺に起れるは世にいふ肺病にして、患者の咯痰中にある病菌の飛

菌

散するより傳染す。或人の計算に據れば、患者の一日に排泄する痰中には、七十二億の菌を有すといふ。豈恐るべきにあらずや。癩は昔は遺傳病とのみ思ひしが、今は傳染病たること明かになれり。病原菌は、鼻汁、膿汁等の中に在り。

トラホームの病原は患者の目より出づる脂に在り。故に人の手拭を借りなどして傳染すること多し。注意せざるべからず。マラリヤは世にいふおこりなり。此の病は蚊の媒介するものなれば、之を避くるには、蚊にさされざる様にすべし。(高等小學讀本)

一八 見舞

疾氣見舞の文

疾一疾

承りしは、お前様は肺炎より入院中
 の由、誠に驚き入りし。お容體如何よし。
 病は氣からとも申しは、かならず弱き
 お心を起したまはず、醫師、看護婦の
 注意を重んじて十分にお養生なされ、
 一日も早くお全快の程ひとよ念じなげ。
 一寸伺ひたくは、海山遠く隔て居りし
 心も任せず、たゞくお案じ申し居る。

蜜一密

水蜜桃少々、平素のお嗜好好まされ、郵送
 いたし、何卒お召し取りなされたく。先
 暇なごころ書中よりお見舞まじ。かこ。

同返事

私入院の事、お耳に入り、お親切にお見舞
 りされ、厚くお禮申しあげ。一時は熱の
 あまりに高かりしたため、人事不省に陥り、
 親にも大いに心配相のけ候ひ、が
 幸甚極まり、経過案外よろしく、おの分

床 牀

かゝるばるを金取問違ふものごと
にや。心入りの賜物は早速いふま
に殊の外おひくき。まゝや病もや
坂まゝ、日増に之氣づくものりには
必ずくは案じひさるまゝ。まは返
まじ、床の中よりのみがれ書何卒
判じ讀みひきかへ。かゝる。

暑中見舞の文

日中は寒暖計も九十度より、殊の外ある

折 折

暑中見舞、おひくきあせられ
こゝ許清く仕健より暑し居り
おからうと安心ひきかへ。手製
の葛饅頭、減子不出まはし
印もかたに一言目にかける
何卒お笑味ひきかへ。おは
時候くはくもは厭ひの原
敬ひなす。かゝる。

一九 わが故郷

徳富蘆花

屏
||
屏

わが故郷は九州のほゞ真中で、海に遠い地方、幅一里長さ三里といふ、もつさうの底見たやうな谷がわが揺籃です。どちらを向いても雑木山がぐるりと屏風を立て廻し、その上から、春は青くなり冬は白くなる遠山がちよいく顔を出して居る。最も高いのは東に一つ孤立して居る高鞍山で、だれが天邊に乗り捨てたのか、さながら鞍を置いたやう。雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる、この山が見え出すと、どんなに降つて居てもやがて晴れる。雲がかゝ

象
||
象

るのも、日が射すのも、まづこの山が第一で、いはゞわが故郷の氣象臺だ。四方の山から混々と湧き出る清水は集まつて村人の謂はゆる大川・小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田、その田を無理におしのけて、此處に村が一撮み、彼處に家が二三十。北の隅にあるのが妻籠つまごの里といつて、まづこの谷の都で、町といへば町、戸數は千にも足りない。取り出していふ程でも無いが、今も忘れ難く思ふのは、水の清さと、稻の美しさである。たしか東京に積み出して、鮭米にするさうな。その稻葉のつや

と青んでのびくと立ち揃つた所は、都人士に見せ
 もしたい。實に見せたいです、蛙の聲を踏み分けて
 一村總出の田植時、早乙女の白手拭がひらりくと
 風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れる頃の賑やか
 さを。それから炎天の草取りは、わきで見てもつら
 いが、しかし、夕方、暑い、堪らぬ。」といふ下から、ごろく
 鳴り出す。突然大氣が冷える。ふつと見ると、黒雲
 がもう高鞍山を七分通り呑んで居る。それがイン
 キの散るやうに、ずうと満天に浸みひろがつて来る。
 稲妻がびかり。烈しい雷鳴が二つ三つ。冷たい風

満々

がさつと吹いて来ると、やがて大粒の雨がぼつり。
 耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃げ延びぬ中に、鳴
 る、光る、降る、吹く、世の終りかと思ふ程の荒れやう。
 と思へば忽ちずうと明るくなる。笠おつ取つて出
 て見る頃は、夕立は最早隣村へ逃げのびて、隣村はさ
 ながら簾越しになつて居る。大空を眞二つに割つ
 て東の方はまだ眞暗、雷様がごろく、太鼓を敲いて
 居るが、西の方はあかくと夕日がさして、高鞍山の
 てつぺんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい
 虹が立つて居る。あゝ涼しい。御覽なさい、先程ま

東東

稲二稲

で萎えしをれて居つた稲が、たつた一瞬の間に眼も醒める程あをくとなつて一二寸も伸びたやうに、どこを見ても、さわくくときめいては露を揺りこぼして居る。濁り泡だつ田の水はどくく溢れて、小鮒や鱒がやたらに畔路にはねて居る。

*夏夜稲花の開ける頃、炬を焚きて、これを集めて、海川などに流す。

蟲送りも濟んで、初秋の風がそよくと稲葉に音づれる頃は、夜は露より明けて朝日に匂ふ稲花の美しさ。二百十日二十日の厄日も事なく過ぎると、青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、こゝにもさわさわ、そこにもさくく、收穫のさかりになれば、だれ

湧二涌

を訪うても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降り出すと、夜晩くまで舂すりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稲が、最早綺麗な米俵になつて、庫や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓うつて豊年を祝ふのである。それから水あゝこんな水が縦横に市中を流れて居たら、東京もどんなによからう。わが故郷では殆ど井戸の用なしといつてよい位。四方の山から混々として絶えず湧き出る清水は、縦横に小さな流をなして、鮎はしる二つの川に落ち合ふ。どこに行つて

氷ニ氷

も潺々淙々の音が聞える。夏の月夜など、じつと聞いて居ると實に好い。京都は水がよいといふが、自分は京都よりもよいと思ふ。馬が飲む道傍の小溝の水も、女が洗濯する家の前の流も、乃至水車がかきまぜる田川の水も、實に氷と冷たく、玉と澄んで居る。今でも夏になると、自分は一入故郷をしのぶのである。(思出の記)

二〇 教へ草

某家の少女、夏季休業に近づく頃、一日學校より歸り

伸一伸

て、さも物思はしげに、しをくとうち萎れて居たれば、母は心配して「何事かありし。」と問ひけるに、少女答へて、「今日、學校に登りたるに、わが最も仲よきお友達二人は、休業の翌日より、或海岸の別荘へ行くと言はれぬ。また、たれくも涼しき地方へ旅行すと言はれたり。されど、わが身は毎年東京にのみ居て、旅も出來ず、別荘もなし。『旅行は體育にも智育にも甚だ有益なり。とりわけ海邊の空氣は身體に宜し。』と聞けるに、われのみはさるよきことを爲す能はざれば、身體も段々悪しくなるべく、知識も人々に劣り行く

賢一腎

べし。それを思ふ故に、つい悲しくなりぬ。といひぬ。つくぐと聞き居たる母は、わが子の心を憫然とは思ひしかども、元來賢き婦人なりければ、ほゝと打笑ひて、何事ぞと思ひつるに、左様のことにてありけるか。子供心には、しか思ふも一應ことわりなきにはあらねど、そは一を知りて二を知らぬなり。いかにも御身のいふ如く、わが家財裕ならねば、夏は避暑、冬は避寒などの贅澤のかなふべき筈なく、御身を人なみに學校にあぐるさへ、父上の一方ならぬ苦勞なり。併し寒暖計の百度以上にも昇る熱帯の地方にては、

涼二涼

避暑の必要もあるべく、その零度以下に降る寒帯の國柄にては、避寒の必要もあるべし。されど、我が國の如き温帯の地に於て、夕方よりは涼風のそよ吹くを常とする東京の殊に山の手に住む我等が、夏を他に避けざるべからざる要何處にかあらん。身體保養の爲に空氣を換へ、知識を増進せしめん爲に未知の境に赴くは固より望ましきことなれども、人は心に見ざれば眞に有益の物を認むること難く、心に聞かざれば決して有益の事を聞き得ること難し。されば、多くの金を費してさまざまの所を經巡りたり

隱
隱

とも、心をとめて見聞くにあらずば、何の得る所もあるべからず。
又、體育の上もしかぞかし、廣からずとも庭の雜草を抜き、狭くとも家の掃除をなし、親子互に睦びあひて家庭圓滿なるを得ば、かの入りては大廈高樓に起臥し、出でては侍婢・從僕に隨伴せらるゝ人の、笑の中に涙を隠し、憤の顔に悦を粧ひて、夏は山邊の別莊に遊び、冬は海邊の旅館に宿りつゝ、はかなき歡樂に心中の鬱悶を消さんとせる者に比すれば、その幸福の勝る、はた幾ばくぞ。

肝
肝

且、人は時として寒暑にも耐へ、櫛風浴雨にもはゞまざる鍛錬の工夫肝要ぞかし。富貴に飽ける子弟に英雄・偉人を生ずること少なく、貧困に耐へたる子女等が中に豪傑・秀才を出すこと多し。御身若し誠の人とならんと欲せば、今日の不足は他日の幸福の基なることを信じて、目前の娛樂を羨むことなかれ。こ諭しければ、伶俐なる少女は、げにもと悟りて、この賢き母の膝下に楽しき夏を送りぬとかや。

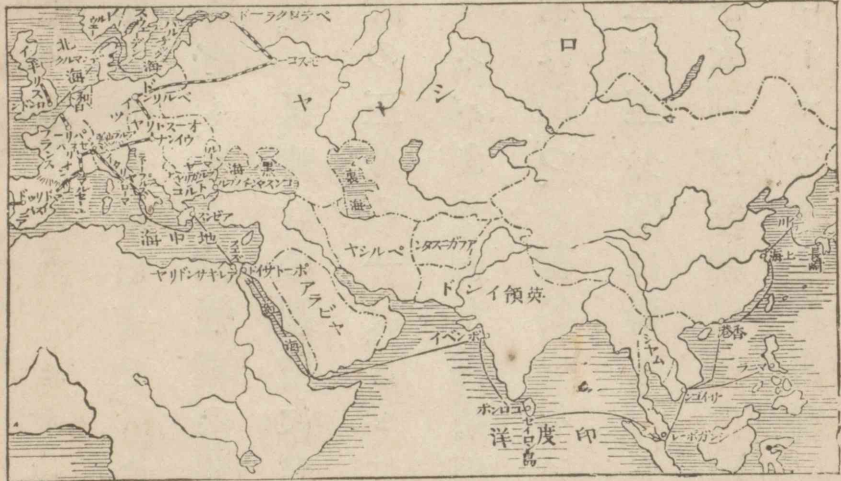
(日本婦人に據る)

二一 世界周遊 その二

島嶋

倫敦より汽船に乗りてテムス河を下り、やがて北海に出で、ベルギー・和蘭を右に見て、デンマルクの半島を一周し、バルチック海に入り、露國の首府ペテログラードに著く。航程四日半なり。このあたり、季候甚だ寒くして、晝夜の時間到大差あり。こゝより二百里ばかり北なるラプラントには、前半年閒晝にして、後半年閒夜の處ありといふ。ペテログラードより汽車に乗りて十二時間一直線に東南に走れば、露國の舊都なるモスコフ府につく。この市はかつてナポレオンに攻められて大半焼けたり

獨一



しも、今は再び繁華となれり。モスコフより汽車にて西に走ること三十時間にして、獨逸の首府伯林につく。人口二百餘萬、歐洲第三の都なり。獨逸は學術の進歩せる國にて、大學の數二十五あり。伯林より南行八時間にして、オーストリア 澳大利の首府ウイennaに著き、これより西行十餘時間に

旅—旋

して瑞西スウェーデンに入り、ゼネバ市ジュネーヴに達す。市はゼネバ湖畔にありて景色よし。この國は、わが九州程の小國なれども、よく諸強國の間に立ちてその獨立を維持せり。又、時計の製造に名高く、全世界に用ひらるゝ時計の三分の一は、こゝにて製出せらるるといふ。ゼネバよりまた佛蘭西に入り、東南に旅行して伊太利に出づ。有名なるアルプの嶮も、隧道の工成りて、二十五分間に過ぎ得たり。伊太利は歐羅巴の古國にて、昔の建築・彫刻など、今もローマを始め諸都府に残れり。ローマよりネーブ

遊—游

ルス港に赴きて汽船に乗り、地中海を東航して、希臘古代の名都アゼンスに遊び、さて、また船を東南に進めて埃及エジプトのアレキサンドリヤ港につく。埃及は、世界最古國の一にして、ピラミッド・獅身像スフィンクソなど當時の遺物なほ存す。此の國、今は土耳其國の領となれり。アレキサンドリヤより、東、蘇西スエズの運河を経て、紅海に出で、更に東の方孟買ボンベイに向ふ。運河は長さ四十里、幅五十間。三十年前の開鑿にて、歐亞航行の便を與ふること少なからず。船、印度洋にさしかゝれば、暑さはげしくて、千六百哩

惱—腦

の航路、惱まぬものなし。孟買は印度西端の良港なり。山野に出づれば、熱帯植物いやがうへに生ひ繁りて、奇樹・珍草少なからず。こゝより南航してセーロン島のコロンボに著く。政廳あり。市街の繁盛なることわが神戸に似たり。黒奴の演劇、旅情を慰むるに足る。

船は直ちにシンガポールに向ふ。千二百十三哩の長航、水のみを見て暑さにあぐまぬはなし。七日目に著く。港内の船舶、市街の巨館、げにや東西貿易の中心たるに恥ぢず。こゝを發して西貢サイゴンに立ち寄り、

快—快

七晝夜、千數百哩を走りて香港に著く。英領の一孤島なれども、港のにぎはひはシンガポールに譲らず。マニラに行く便船もあり。われらが船は更に八百七十哩を走りて上海に著く。港内水深ければ、船は埠頭に横づけすべし。上海を發して仁川に著けば、故國遠からざるを知り、歸心矢の如し。長崎に著きしは、仁川を發して二日の後なりき。あゝ、快速なる世界周遊なりしかな。

二二 萬國比隣

志賀重昂

桑—栗

三河は古來有名なる木綿の産地なり。されど近年、支那・印度・北米合衆國より輸入する棉花の精良にして、價廉きが故に、今や三河にては綿を植うるもの殆ど無きに至れり。山陽および四國の畑には、日本種の西瓜は漸く見えず、大概は西洋種となれり。是、西洋種の西瓜は日本種のより砂糖分も多く、味も佳きを以てなり。眞桑瓜も亦之を植うるもの漸く少なく、西洋種の梨瓜といふもの、之に代るに至れり。又、我が國の材木は價貴きを以て、北米の太平洋沿岸より頻りに材木を輸入し、製紙の一原料たる樅の木

麥—麦

屑の如きも、北米の加奈陀、又は歐羅巴の北端なる瑞典・那威より輸入し來る。其の他、肥料なる骨粉は南半球の濠太利亞より、鳥糞は印度洋中の諸島より、硝石は南米の南端なる智利より輸入し來り、鹽鮭と、菓子に用ふる麥粉とは北米合衆國より、鹽漬の牛肉は濠太利亞より輸入し來るなり。摺附木即ちマッチは、從來我が國になかりしものなり。されども、我が國に於ける製造法漸く熟練し、價も亦廉くなるや、我が國のマッチは東洋・南洋及び歐

縁
緑

羅巴の一部に需用せられ、歐羅巴に於けるマツチ製造場の之が爲に倒産するもの多きに至れり。手巾即ちハンケチも、從來我が國には無かりしものなり。されども、我が國の女子は其の縁を縫ふこと精巧にして、價も亦比較的に廉きを以て、絹ハンケチは歐羅巴・亞米利加・濠太利亞などに輸入せらるゝこと夥しきに至れり。ピアノ・オルガンも、亦從來我が國には無かりしものなり。されど、我が國にて製造するもの漸く精良となり、價廉くなるや、歐羅巴・亞米利加より次第に需用し來るに至れり。

且
旦

麥稈眞田の編み方も、亦西洋より傳へたるものなり。されども、我が國にて編むもの甚だ精良に、且價廉きを以て、歐羅巴・亞米利加及び濠太利亞に夥しく輸出せらる。蝙蝠傘及び麥酒も、共に從來我が國に無かりしものなり。されども、今や我が國にて製造するもの、盛んに東洋及び南洋に輸出せらるゝに至れり。勿論、我が國固有の生産にして、西洋人に壓倒せられたるものあり、されど、西洋傳來のものにてありながら、邦人が西洋人を彼の地に於てさへ壓倒せるもの少なからず。露領西比利亞の東部に於ける寫眞師・

概 槩

時計直しの大概日本人なるが如き、其の適例なり。此の如く、今や萬國比隣の如く、世界は共通となれり。苟も爲すあらんと欲するもの、豈活眼を開いて世界の情勢を觀察し、以て國益を増進せんことを務めざるべけんや。(地理學講義)

二三 日本人の生活

中江兆民

我が日本人の生活ほど世に不經濟なるものはあらず。彼等は自己の郷里たる東洋に生活するのみならず、更に他人の郷里たる西洋に生活す。

録 祿 綠

彼等の生活は亞細亞・歐羅巴の二大洲に跨れり。彼等は日本服二三襲を所持する外、更に洋服をも二三襲所持せざるべからず。葉卷紙卷の煙草を燻らしつゝ、更に煙管・煙草入を所持して刻煙草を燻らさるべからず。その中産以上に在りては、煉瓦の洋館と御殿造りの日本室とを築造せざるべからず。或は西洋料理を食し、或は刺身を食し、或はブランデーを飲み、或は正宗を飲み、昨日は純然たる巴里・倫敦の紳士たりしもの、今日は翻然として元祿時代の物持の風を装ふ。此の如き人民は古今内外絶無にして、

稀有なるものなり。

かく同一身にして二大洲の生活を爲すことは、國家の經濟上に大關係を及ぼさざるを得ざるべし。經濟的眼孔を放ちて仔細にこの二様生活の結果を推究するときには、其の及ぶ所の範圍たる、必ずや極めて廣大なるものあらん。且、近く考ふるに、我が邦に産出する所の物品の百中の九十九は獨り我が邦に於てのみ用ひらるべきものにて、到底外國人には用ひらるべからざるものなり。翻つて歐米諸國を看よ、凡そ自國に産するものは、其の價だに廉ならば皆他

圖一

蓋二蓋二

國にても用ひらるべきものにて、即ち内國の用を省くか又は内國に餘りあれば、一物として他國に輸出せられざるはなし。歐米諸國には政治上の境界は存すれども、生活上の境界は存せざるなり。我が日本人は内國産物の九十九を費消して僅かに其の一を輸出し、而して内國産物の原料と共に、かの二様生活の必要よりして、多く外國の精製品を輸入せざるを得ず。輸入超過は蓋し生活上自然の趨勢なり。自國の物産中、外國に輸出せらるべきものは、大抵皆原料品と類似原料品とにて、即ち生絲・茶・紡績絲・海産

芋一竿

物等の外に出でず。澤庵大根如何に豊作なりとも、薩摩芋如何に多穫なりとも、久留米・緋有松絞如何に廉價なりとも、四方の海を踰ゆることは到底出來得べからず。それ獨自一箇に日本に生活して、更に他國人と共に他國に生活す。その極めて不經濟にして、多く買うて少く賣らざるを得ざるは、洵に當然の理と謂はざるべからず。而して歐洲生活の風は近時長足の進歩を爲して、我が邦人中二様の生活を爲すもの、數益増加し來りつゝ、あれば、歐洲物品の潮の如く侵入し來るは固より怪しむに足らず。經世

家たるもの、豈根本的考慮を此の點に致さずして可ならんや。(一年有半)

二四 家庭の經濟

下田歌子

主婦たる人に是非無くてならぬのは經濟思想で御座います。經濟などと、むづかしく申しますると、なかく容易でないやうで御座いますけれども、一家の經濟を都合よくして行くことは、注意をさへ怠らなければ、そんなに面倒な事ではありますまい。つまり昔の人が申された通り、入るを量つて出づるを

怠—怠

對_二對

制す。」といふ有様で、此の家庭の一ヶ月の収入は何程になる。そこで家族は何人で、これに對する一ヶ月の費用はこれ程でなければならぬといふやうに、大體の計算を先づ立て、その豫算によつて事をなし、臨時の狂ひがあつた時には、種々都合して、一ヶ月の収入より支出の方が多くならない様にすれば、まづよいので御座います。これを確守することの出来る人ならば、一家の經濟を任せても、差支なからうと思はれます。

所が婦人に限らず、男子の方でも、中々それだけの事

算_二算

を嚴重に遣り通す人が少なう御座います。斯様に日常の事を取締るに就いて、第一に必要なのは綿密周到の心で御座います。朝から晩までその日の生活に費した金額、交際の爲に出した金額、其の外の種種の出費を一錢一厘の末までも嚴重に書き留め置き、其の日の終りに至つて之を計算し、その總額をその日一日の収入と差引して決算するのであります。随から、その手数は中々面倒なものでございます。随つて、餘程綿密な人でなければ、どうしても毎日閒斷なく續ける事が出来ないのも無理はありませんが、

豫_二豫

男子は兎も角女子であつて、これだけの辛抱が出来ないやうでは、とても一家の主婦たる役目を完うすることはできません。

けれども毎日々々の事でありますから、さう豫算で定めた通りにきつちりに行くものではありません。中には思はぬことが湧いて来て、當にもせぬ金銭を幾日分も一度に出さねばならぬことがあります。

さうするともう落膽して、會計など書き記すも馬鹿馬鹿しいと云つて、止めてしまふやうなこともあります。ませうが、是では一時の損失によつて全體の利益を

責_一貴

打棄て、しまつた様なものがあります。さう云ふ不時の事があればこそ、尙更主婦たるものが家庭の經濟を大切に取扱はなければならぬので、御座いますから、かやうな事に決して落膽せずして、續けてゆかなければなりません。

その他、或は子供が多くて出来ないとか、又は仕事が忙しくて、そんな事に關係して居られないとか申して、其の方に餘り心を注がぬ方も御座いませうが、それは主婦としての責任を盡したものは云はれません。少時間でも作る工夫をして、時を上手に使つて、自分に従事する様に

任一仕

すべきであります。

その日くの收支も知らない様では、随つて全體の經濟に疎いのは已むを得ません。經濟に心をそぐことの少ない人は、入用があるに任せて、彼も是もと買入れ、扱月末の支拂時になつて、俄かに狼狽したり、つい支拂の出來ぬことをして不信用を招いたりいたします。これでは家庭の主婦として立つ事は到底無理で御座います。されば婦人は、一般に經濟上の心得のあるべき事は、今更云ふまでもない事で御座いませう。(婦人常識の養成)

二五 笑話二則

かんにん

柳澤 淇園

堪一港

或人、文盲なるものを異見して、世の交は他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし。」といへば、文盲の人は頭を傾け、「かんにんとは四字にて侍らずや。」と指をもて數へ、「御許にはおぼし違へなるべし、かんにんと四字にて侍り。」といへば、意見せし人曰く、「愚昧の人かな、堪忍とは、たへしのぶとよみて、二字なり。」といへば、又頭を傾け、「たへしのぶならば、又一字ふえたり、五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思

腹
腸

ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり。といへるに、其の人又曰く、汝が如き愚昧の文盲は、實に諭し難し。人に似て蟲同様なり、おのれがきまゝにすべし。と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても少しも腹立ち侍らざるなり。とて笑ひきとぞ。(雲萍雜誌)

猫

篠崎 東海

人は賢不肖とも、自己の識見はありたきものなり。昔或なま好事のものありき。或時鼠を防がんため

龍
竜

に猫を飼ひぬ。毛色黄ばみ、形大きくしてたけぐしく、さながら畫ける虎に似たれば、とらと名づけて寵愛せり。友人來りて其の故を問ふ。答ふるにその意を以てす。その人のいへるやう、それはまだ至らぬ沙汰なり。虎より強きものあり、世に龍虎といへれば、龍こそまされ、といふ。「さらばその意に従はん。」とて、龍と名づけぬ。然るに、又さる人の來りて、それも至らぬなり。龍を載せて空を走るは雲なり。といへば、また雲を吹き散らすは風なり。風こそよからめ。といふ人のありけるまゝに、風と名づけ置きた

猫一掃

るに、又人ありて、「何ほどはげしくとも、吹き破ることの叶はぬは壁ならん。」といへば、いよく惑ひて、「いか
が名づけてよからん。」と、あたりの人に問ひければ、壁
も呼びにくからん。壁に穴を穿つものは鼠なり。
それを捕ふるものは猫ならん。」といはれて、はじめて
心づきたりといふ。これ、おのれ識見なきが故に、こ
こに問ひ、かしこに尋ねて、いよく迷へるなり。あ
まりの好事は益なきものなるべし。(問はず語り)

二六 鳥なき里

島崎 藤村

網一網

鳥なき里の蝙蝠や、
宗助鍬をゐたよかけ、
幸助網を手に持ちて、
山へ宗助、海へ幸助。
胡瓜花をき、夕影に、
蟬鳴くかなと、桑の葉の
露よすゞしき山道を、
海よりうらやむ幸助のゆゑ。
磯菜遠近、砂の上に
舟干すゐゑた、夏潮の

響—響

鱒藻に響く海の音を、

山にうらやむ宗助のゆめ。

あくもかたれば變る世や、

幸助鍬をかたにかけ、

宗助網を手よ持ちて、

山へ幸助、海へ宗助。

霞にうつり、霜に暮れ、

あちまち過ぎぬ、春と秋。

れぞみえ草の花のおと、

砂に埋きて見るよ志もなし。

跡—蹟

やながらそれも一時の

胸の青雲いつこぞや。

かへりみすきは、跡もふき

宗助乃ゆめ、幸助のゆめ。

ふたゝび百合はさねかへり、

ふたゝび梅は青みん里。

深紅緑の樹の蔭を

迷うて歸る宗助、幸助。(落梅集)

二七 農人形

歡—歎

水戸の常磐公園は日本三公園の一と稱せらる。その小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔て、一帯の郊野を雙眸の中に收むることを得べし。園は徳川齊昭の創設せし所名づけて偕樂園といふ。蓋し民と偕に楽しむの義に取れり。されば四時常に士民の來り遊ぶにまかせ、花晨月夕自由にその歡樂を竭さしめきといふ。こゝに素焼の人形を鬻ぐ。結髪のお老農、笠をその前におきて積藁の側に坐せるものなり。製法極めて麤なりと雖も、頗る雅致に富めり。世人呼んで之を「烈公の農人形」といふ。齊昭、居常深

穡—穡



農人形

飯粒を之に供へ、然る後に食するを例とす。

或時齊昭は、

朝なく、飯食ふごとに忘るじな、

恵まぬ民よ恵まる、身を。

施_一旋

といふ一首の和歌を侍臣に與へて曰へらく、古より、賢君は民を見ること、なほ慈母の赤子に於けるが如しといへり。されど、余は百姓をばわが乳母なりと思ふ。余は百姓に對して何等の惠を施さざれど、百姓はわが爲に命を繋ぐべきものを與ふ。その恩は乳母と異なることなし」と。爾來侍臣等は、此の農人形を呼びて、御百姓といふにいたれりとぞ。今鬻ぐところの農人形は蓋し之を摸造したるなり。前賢の意を勸農に用ひしや、まことに深しといふべし。齊昭の祖先なる徳川光圀も亦嘗て隱棲の地を西山

*水戸城の北
太田の郷に
あり。

意_一竟

といふ處に擇びぬ。光圀は暇ある毎に農民を茲に引見して、農事を談ぜりといふ。庵を西山莊と稱し、池を心字の池といふ。池を隔て、谷あり、山あり。春秋の觀賞兩つながら好し。名づけて櫻が谷觀月山といふ。室は廣さ十數人を容るゝに過ぎず。殊に書院との間に全くその闕を撤せるは、貴賤の別を離れて親しく農民と談話を交へんとする意に出づと聞く。齊昭の精神は多く光圀より得來る。その意を農事に用ふるも、亦前後相承けたりといふべし。

(田園都市)

二八 田園日記

九月一日。朝いと涼し。曇り勝なる空より日影をりをり漏る。風なし。「今日は誠に結構な二百十日で。」と垣越しに鄰の人挨拶す。梨畑に柵を作る。竹を截り索を結び、午に至りて成る。午後玉蜀黍を引く。夜に入りて雨。

棗
棘

二日。曇。裏山につくくぼふしの聲かしまし。小藪の中なる棗の實の漸く色づきたるを、悪太郎ども謀りて取らんとす。午後三時ごろ霽る。蜜蜂の巢を窺ふに、出入忙はし。茄子の畠を打ち返

晴
晴

して葱畠一うねを作る。夕方西北の風。
三日。暁より雨降る。友を訪ひて薄暮に歸る。雨やむ。蟲の聲とみにさわがし。
四日。陰晴定まらず、雲に殺氣あり。この朝殊に冷かなるを覺ゆ。二宮尊徳傳を讀む。感奮するところ少なからず。雨驟かに降り出でてまた忽ちやむ。畑に出でて草を抜き、萘を移し植う。一株毎に白き花咲きたり。
五日。陰曆八朔。舊例により餅搗きて祝ふ。小雨しとくと降る。晝過ぎやうくと霽れたれば、松

畑
—
畠

原に散歩す。

六日。終日雨。畑のものも庭のものも皆腐り果つるこゝちす。風なし。

七日。雨尙止まず。午後、友の父の喪にこもり居るを訪ふ。小暗き座敷に抹香のかをり満ちて、話いたく沈みがちなり。秋のあはれはこの一室に集めたりと謂ふべし。

八日。今日も雨やまず、風さへ吹き出でたり。洪水あるべしなど噂とりくくなり。我が畑を窺けば、葱はさながら髪を亂せるごとく、蕃椒は仆れて地

に這ひたり。夜更けて風の音すさまじ。

九日。思の外に雨霽れんとす。折々蟬の聲漏れ聞えて洪水の沙汰はやみぬ。六日の東京新聞未だ届かず。都の秋はいかならん。夜は五日月、芋の葉にさやかに。

十日。一天晴れ渡りて、秋高く風穩かなり。野川に釣せんとして家を出づ。稻花已に散りて萬頃の穂波を打寄せたり。「この調子なら、今年は豊年だ。」など道行く人の語り行くもめでたし。夕方、鮒少し獲て歸る。(ほととぎすに據る)

釣
—
釣

二九 佐藤つる

井上 毅

佐藤つるは岡山縣後月郡出部村の人なり。幼くして父みまかりければ、母及び姉とともに世をおくりけり。もとより貧しき家なれば、母は二人を育てんとて、人に傭はれなどして辛うじて年月を経にしが、憂苦のあまり遂に精神の疾にかゝりぬ。姉なる子は愚かにて、物のことわりをだに辨へず。つる、時に七歳、姉を勵ましつゝ、ともに母の疾を勞はりけり。されど、生計の道だに得ざれば、餓に迫るばかりなりき。たま〜憐みて糧を與ふるものあれば、つるは

辛幸

捧棒

喜びて之を受け、先づ母に捧げ、次に姉に進め、尙餘りあれば、みづから飢を支へたり。後に母の疾や、癒えて、姉は近村の人に嫁ぎければ、今は、つる、ひとりして母を養ひ、人の圃を借りて稼ぎ耕し、朝は夙に出て行き、夜は晩く歸り、風をも雨をも厭はで、男子に劣らず働きけるが、圃に出でたる時も、時々は小走りして家に歸り、母の氣色を伺ひけり。天氣暖かなる日などは、前の畚フツに母を載せ、後ろの畚フツに鋤クの類を載せ、手弱き肩



井上毅 像

て母を養ひ、人の圃を借りて稼ぎ耕し、朝は夙に出て行き、夜は晩く歸り、風をも雨をも厭はで、男子に劣らず働きけるが、圃に出でたる時も、時々は小走りして家に歸り、母の氣色を伺ひけり。天氣暖かなる日などは、前の畚フツに母を載せ、後ろの畚フツに鋤クの類を載せ、手弱き肩

擔—擔

に擔ひもて行き、母をば田の畔或は樹の蔭に休らはせ、おのれその傍に耜を執りて、母の心を慰めけり。つるは平生麤衣惡食、蓬髮に櫛をだにも插さざれども、母の好むものは、何くれとなく求めて得させけり。母年いたく老いて、夜もとかく眠に就きかぬれば、つるは枕邊に侍り、或は背を撫で、或は肩を捫みなどして、母の眠るを待ちつ。さて細き燈の下に絲を績ぎ、小車を繰りて、夜ふくるまで働きぬ。ある人その孤勞を憐みて、夫を迎へよなど勧めしに、つるのいへるやう、他人をわが家に入れなば母の心安かるまじ。

歸—歸

母のこの世にましまさん間は、獨身にてあるこそよけれ。たゞ貧しきために心に任せぬ事の多かるぞ恨めしき。とて、涙に咽びしを、聞く人袖を沾しけり。此の事官に聞えて、明治十八年十一月、縣令より金若干を賜ひければ、つるは大いに喜び、これ父母の恩なり。とて、たゞちに歸りて母に告げ、又、親戚郷里の人に向ひて厚く恩を謝したりき。

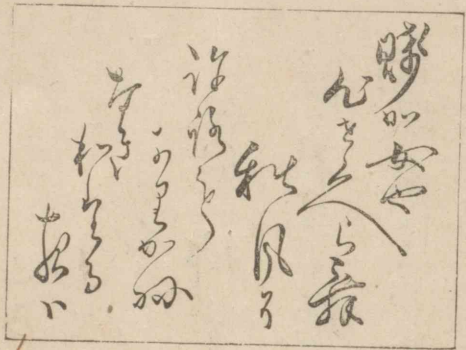
明治二十三年六月、母の疾重りて頼み少なく見えければ、つるは憂に堪へかね、十日あまりは、夜も睫を交へずして、一すぢに勞はりけり。母、今はの際になり。

勞二勞

つるを呼びていへらく、「汝手弱き身ながら、長き歲月の閒家事を勤め、孝養怠りなかりき。今より後、汝はみづからの身を大切に、又汝の姉をいつくしみてよ。」といふ。つるは、「仰にや及ぶべき、心に懸けさせたまふな。」と答へしかば、母は眉を開き、ほゝゑみてぞ身まかりける。時に年七十八なりき。つる、母の屍に抱きつき、いたく悲しみ歎きて、人心地も絶えぬるばかりなりき。かねて日夜勤勞の結果として、田圃二段まで闢き、その收穫せしものを衣食の料にあてつ。尙餘りありしを、嚮の縣令の賜物と共に郵便局

喪一喪

に預け置きければ、それを取り出して葬送の料に充てけり。さて喪畢りたる後も、朝夕に香を焚き、火を



井上殺筆蹟

點じ、菓物を供ふるなど、母の生けりし時の如くにし、また姉によく事へて、母の遺言をばあだにせざりけり。

つるは、かく孝行すぐれしのみならず、一家の主として公令を守り、田租・雜稅など、掟のまに、人にさきだちて納めけり。明治二十四年十二月、此の事雲の上にも聞えて、

勅定の緑綬褒章を賜ひ、その善行を表彰せられたり。

賤が女や心せくらん、秋風に

ころもかりがね鳴き渡る夜は。(梧陰存稿)

兔二兔

三〇 郷里の弟に遣はす 高山樗牛

涼氣日よ増し骨にしみし。當地は兎角
雨天勝る、今よりやしく晴天とお成りの
様子あり。此の模様こそ見まは、鶴雲の
寒ても一入思ひ遣はれ、氣だうそそそ

栗一栗

なすず。此の況及如何は朝夕を過されし。あ。
日夕懷慕の情堪はず。此の況れ消息の
とだも、何の心かりなす。葉書
なりとも、氣のしきり時は是非よく送
りせられた。栗名月も近づきし。國元
れこそ、赤身のこそ、思ひ出され思ひ出され
なす。別れの時赤身は杖よりし門に
佇立せる状、嗚呼、目先よりつぎ
申し。此のあはれを、赤身はく我、かくは

天の両方よ心なごぬ月を送るごや。秋
 深し、月高し。霜も露もやうく雪とふり
 みごまん。氣永く心まのせに養生專一に
 なりちされしく祈り居りぬ。胸よみち
 みくるけの思はたごは身の推察にまのり
 せんのみ。あぢのりと。(樗牛全集)

三一 甲冑堂

橋 南 谿

驛ハ駅

奥州白石の城下より一里半ばかり南に齊川といふ
 驛あり。この齊川の町はづれに高福寺といふ寺あ

孤ハ狐

り。奥州筋近年の凶作に、この寺も大破に及び、僧も
 住せず、空寺となり、本尊だに何方へ取り納めしにか、
 寺には見えず。庭には草深く、誠に狐・梟のすみかとい
 ふも餘りあり。

此の寺中に又一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。
 堂のかきつけには故將堂とあり。大きさは僅かに二
 間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれ
 ば、この小堂の破損はいふまでもなし。やうく縁に
 縁にあがり見るに、内に佛とてもなく、只婦人の甲冑
 して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかな

繼信

る人の像にかと尋ぬるに、佐藤繼信・忠信二人の妻の像なりとかや。

その昔、義經、鎌倉殿の義兵を挙げたまふを聞き、秀衡に暇乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤莊司、わが子の繼信・忠信を御供に出せり。その後、義經京都へ攻めのぼり、平家を追ひ落とし、一の谷・八島などにてさばかりの大功を立てたまひて再び奥州に下り給ひし時、はじめ附き従ひて出でたりし龜井・片岡など皆無事に歸國せしに、繼信は八島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義のために命を殞し、兄弟二人と

能登守平
經。

挟狭

も他國の土となりて形見のみ還りしを、母なる人悲しみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけ、せめては一人なりともこの人々の如く歸りなば、など泣き沈みぬるを、兄弟の妻女その心根を推量し、わが夫の甲冑を著し、長刀を脇挟み、勇ましげに出でたち、只今兄弟凱陣せり。とて、その倂を學びて老母に見せ、その心を慰めきとぞ。その頃の人も二人の婦人の孝心をあはれに思ひしにや、その姿を木像に刻みて遺し置きたりとなり。

嗚呼兄弟の人は古今例少なき忠義武勇の士なり。

鑑
鑒

その人に連れ添ひし婦人、亦希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍しきことなり。余この物語を聞き、この像を拜するに、そゞろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像なれど、香華を手向くる僧なきのみか、小堂のかく荒れに荒れ果て、風雨をも禦ぎかぬるを、たれ一人あはれといひて一錢の賽物をだに供する者もなきは、世には忠孝に感ずる人の無きにや。このまゝにては年月に荒れ行き、遂にはあとかたもなくなり果て、これらの事を語り傳ふる人もなきに至らんかと、餘りにあはれに

覺えしかば、委しく書きつけて歸りぬ。(東遊記)

潛
潛

三二 大和魂の權化

明治四十三年四月十五日、我が海軍第六號潛水艇は他の僚艇と共に水雷母艦歴山丸に従ひて吳軍港を發し、廣島灣を横斷して周防國岩國の海上約一里の點に到着し、各種の演習に従事せしが、俄然その行方を失ひ、豫定の浮遊時間を経過するも其の姿を海上に現さざりき。

母艦及び僚艇の乗組員は大いに驚き、直ちに近海の

名は定一。
準一準

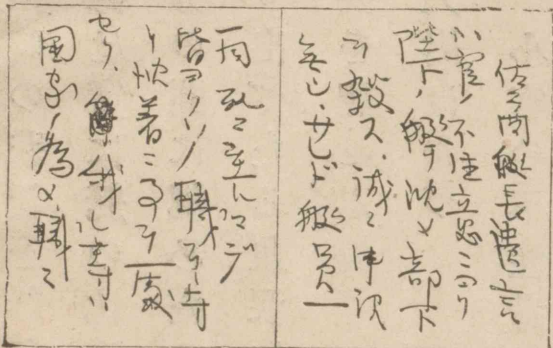
搜索を始むると共に急を吳鎮守府に通じければ、鎮守府は即時軍艦豊橋に救助の命を發したり。よりて平岡同艦長は急ぎ出港の準備を整へ、搜索竝に引揚に要する探海用具、起重機等を積み込みて遭難地に急行せり。

名は勉。

かくて翌十六日午後に到り、漸く其の沈没の箇所を發見せしかば、直ちにこれが引揚に著手し、十七日午前七時半その作業を終へ、艇内の排水と換氣とを行ひ、艦内に入りて之を検するに、潜水後既に數十時間を経過せることゝて、艇長佐久間大尉は腕を拱きた

名は芳太郎。
名は政太郎。

るまゝ、端坐して絶息し、部下の乗組員長谷川中尉、原山機關中尉以下十一名の勇士、いづれも或は仰臥し、或は安坐せるまゝ、艇とその運命を共にし、頗る悲壯なる光景を呈したり。



佐久間大尉の遺書

大尉は若狭の人、沈勇を以て知らる。此の異常の變に遭ひて、毫も狼狽せる様なく、部下を指揮してあらゆる應急の手段を講じ、且自ら筆を執り、呼吸の困難を忍びつゝ、泰然として沈没

當時の狀況を詳記し、これを艇内に遺せり。この記録は實に艇の沈没後午前十一時より午後零時四十分の間に認めたるものにして、言々句句至誠より迸り出でたる血涙にあらざるはなし。今左にその概要を記せん。

大尉は先づ、

小官の不注意によりて陛下の艇を沈め、部下を殺す。誠に申譯なし。

と至尊に謝し奉り、なほ一身の危急を忘れて偏に國家の爲に潜水艇の將來を憂へ、

譯二訳

されど艇員一同死に到るまで皆よくその職を守り、沈著に事を處せり。我等は國家の爲職に斃れたり。毫も憾とする所なし。たゞ憾とする所は、今回の事變の爲に潜水艇に關する研究の頓挫せんことと是なり。願はくは諸君益奮勵して潜水艇の發展に全力を盡されんことを。

没二没

と述べ、更に沈没の原因、經過及び自家平生の覺悟を敘したる後、至尊に對し奉りて、

謹んで陛下に白す。仰ぎ願はくは最も忠實に職務に殉じたる臣が部下の遺族をして衣食に窮す

名は孝三郎
名は直枝

るなからしめ給はんことを。
と歎願し、最後に上長官に對して、
さらば茲に永き訣を告げん。小栗大佐・中野中佐
よ。呼吸は既に非常に困難なり。今は最後なり。
と筆を投じて從容として死に就けり。其の壯烈鬼
神をして泣かしむるに足る。嗚呼大尉の如きは實
に日本武士の典型、大和魂の權化なりといふべし。

實科高等女學校用國語讀本卷三終

僻書房出版圖書に
して地方實業居御
に切相成の居御
品上御支の居御
業有候はに直
合注文被下居度
接御之候致仕候
本多註文被下居度
間直に發送可仕候

明治四十四年四月一日發行
明治四十五年五月一日發行
明治四十六年六月一日發行
明治四十七年七月一日發行
明治四十八年八月一日發行
明治四十九年九月一日發行
明治五十年十月一日發行
明治五十一年十一月一日發行
明治五十二年十二月一日發行
（大正五年五月一日發行）



實科高等女學校用國語讀本奧附

元元堂書房編輯所編纂

定價	
卷一	金參拾錢
卷二	金參拾錢
卷三	金卅二錢
卷四	金參拾錢
卷五	金廿八錢
卷六	金廿八錢
前篇	金廿七錢
後篇	金廿七錢

發行者 瀨川光行

印刷者 堀藤太郎

印刷所 株式會社長林印刷所

發行所 元元堂書房

大賣所 關西 大阪市南區心齋橋筋二丁目六七番地 松村文海堂

東京府內藤新宿區北一丁目八八番地 北隆館書店

東京府北區東町一丁目八八番地 電話替番



版編房書館天友